

高・大・一般 漢字(楷書B)

※楷書A、Bは段級をとわず両方出品も可。

長野 竹軒

鄭羲下碑(鄭道昭)②

應期



〈解説〉

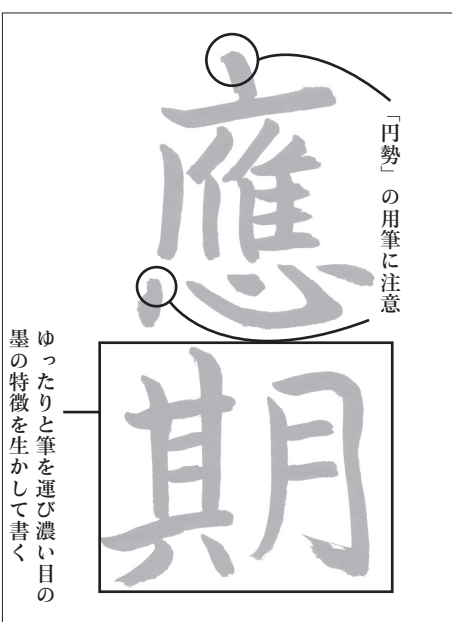
漢字の用筆法には起筆や収筆、転折に丸みを持たせるように書く「円勢」と、対照的に角張らせて書く「方勢」という用語があります。本課題「鄭羲下碑」は、穂先を包み込んで丸みを持たせた「円勢」の代表的な古典といえます。また、「石門銘」や鄭道昭の石刻はすべてこの「円勢」という用筆で書かれた古典です。今回の「應」の一画目の起筆や、二画目の起筆も穂先を露出させず、包み込むように書きましょう。

〈学習上の留意点〉

少し濃い目の墨を使用して書きます。ゆったりと大きな構えで運筆しましょう。

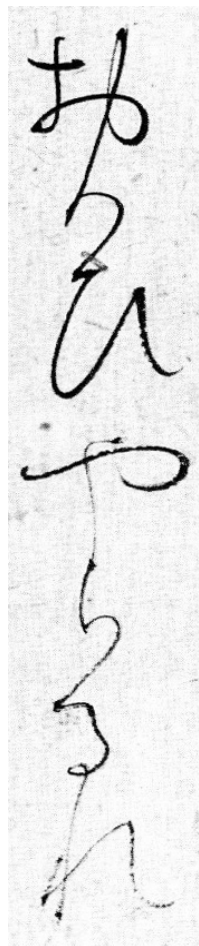
「應」…上下の組み立てから成る漢字をそれぞれ扁平に書く。

「期」…起筆の「円勢」に注意する。



高・大・一般 仮名入門

清水 文博



〈釈文〉おもひ^无やられ

(粘葉本和漢朗詠集)

本課題は「粘葉本和漢朗詠集」の「ここにだに 光さやけき 秋の月 雲の上こそ 思ひやられ」から採りました。

この課題は、連綿に気をつけて書きましょう。一行目は三文字、二行目は四文字の連綿ですが、各行それぞれの文字を一筆で書く必要はありません。突き返す部分などで筆を入れ直して書きましょう。原本は具引き（表面に胡粉を塗る加工がなされたもの）の白い料紙であり、布目が施されています。具引きの白い紙に書かれた「引き締まった線質」をイメージして臨書しましょう。

用紙はにじみの少ない白色半紙を使用してください。大字のためロール紙は不向きです。筆は兼毫筆を推奨します。仮名の小字（細字）用筆は細すぎるため、この文字の大きさに対応できません。ご注意ください。

〈学習上の留意点〉

- 「お」…字形をよく見て書く。
- 「无」…筆の弾力を生かす。
- 「ひ」…「无」を受けてリズムミカルに連筆する。最終部は強調しなくてよい。
- 「や」…小さくならないよう幅広に書く。
- 「ら」…止まる部分に気をつけて正確に書く。
- 「る」…字母の「留」を意識する。下部はつぶれてもよい。
- 「れ」…軽やかに書く。原本の線条をよく観察する。

